

## 第5回石綿研究会

日時：1998年10月31日 10時～14時55分

場所：金沢大医学部 十全記念館（金沢市）

1 世話人挨拶 北川正信（富山医科薬科大医学部病理学）

### 2 研究発表会

座長：平岡武典（国立療養所宮崎病院） 10時05分～11時05分

(1) 「日本病理剖検輯報からみた悪性中皮腫」

村井嘉寛（富山医科薬科大医学部第一病理）ら

(2) 「泉南地区並びに富良野市住民における胸膜プラーク調査」

森永謙二（大阪府立成人病センター調査部）ら

(3) 「市民検診で発見された著しい石綿関連胸膜肥厚斑の1例」

坂谷光則（国立療養所近畿中央病院内科）ら

座長：坂谷光則（国立療養所近畿中央病院内科） 11時15分～11時55分

(4) 「悪性胸膜中皮腫を含む二重癌症例の検討」

岸本卓巳（岡山労災病院内科）

(5) 「悪性中皮腫における1p及び6qのLOH」

小島健作（広島大学医学部第二病理）

（昼食 11時55分～13時）

座長：森永謙二（大阪府立成人病センター調査部） 13時～14時20分

(6) 「石綿曝露に関連した胸膜病変の呼吸機能に及ぼす影響についての検討」

田村猛夏（国立療養所西奈良病院）

(7) 「宮崎での石綿関連疾患」

平岡武典（国立療養所宮崎病院）

3 総会 14時20分～14時50分

## 第5回 石綿研究会

### 1. 日本病理剖検輯報からみた悪性中皮腫

○村井嘉寛、北川正信（富山医科薬科大医学部第一病理）

1958年から1995年までの38年間に、日本病理剖検輯報には悪性中皮腫1,658例（疑診例61例を含む）が記載されている。その発生頻度を3期間（1958-79（22年間）、80-89（10年間）、90-95（6年間））に分けて比較すると、それぞれ0.1%（428/440,334）、0.18%（696/390,124）、0.28%（560/169,345）と増加傾向があった。確診例1,623例の男女比は1,134（69.9%）：488（30.1%）で、平均年齢は61.5歳（1,621例）であった。部位は胸膜1,048例（68.6%）、腹膜380例（24.9%）、心膜95例（6.2%）、精巣4例（0.3%）、組織型では上皮型218例（41.8%）、二相型148例（28.4%）、肉腫型155例（29.8%）であった。石綿肺に合併した症例は53例で、全中皮腫症例に占める割合は3.3%（53/1,623）、3期間でそれぞれ1.3%（5/428）、2.6%（18/696）、5.4%（30/560）で増加傾向がみられた。今後、石綿に関連した中皮腫症例の増加が憂慮される。

### 2. 泉南地区並びに富良野市住民における胸膜プラーク調査

○森永謙二（大阪府立成人病センター調査部）、平岡武典（国立療養所宮崎病院）、横山邦彦（国立療養所近畿中央病院）

平成5年度から9年度の5年間に尾崎保健所が実施した住民健康診断の間接X線フィルム、約25,000枚を読影し、胸膜プラーク所見の有無を調べた。确实及びほぼ确实の胸膜プラーク例は延べ187人、実人数で112人であった。同様の手法で、平成元年度から8年度までの8年間に富良野市住民健康診断の際に実施した間接X線フィルム、約14,000枚も読影した。确实及び疑いの胸膜プラーク例はそれぞれ2例、4例あったが、かつて石綿鉱山のあった山部・布部地区住民（平成6年7月1日現在40歳以上、1,277人）のうち、この期間に受診したことのある610人（47.8%）には、胸膜プラークの有所見者（疑いも含む）は一人もいなかった。

### 3. 市民検診で発見された著しい石綿関連胸膜肥厚斑の1例

○坂谷光則、審良正則（国立療養所近畿中央病院内科、放射線科）

症例は58才（昭和5年生）女性、堺市内住宅地に居住。

[職業歴] なし。[既往歴] 特記すべきことなし。[家族歴] 結核・癌等なし。

[主訴] 10年前ごろから、市民検診の胸部X線検査で常に異常陰影を指摘されている。自覚的には軽い咳嗽。

[理学的所見] 特に異常を認めず。

[検査異常] 血液・生化学的検査に異常なし。喀痰検査に異常なし。血液腫瘍マーカー異常なし。胸部X線写真で両側中下肺野に数個の斑状陰影あり。胸部CT写真で上記擬状陰影は胸膜肥厚斑と思われる。肺野には線維化病変認めず。

[経過] 自覚症状である咳嗽に対し、鎮咳剤投与で経過観察。問診にて、幼少時は熊本県下益城郡松橋町で暮らし、自宅から1km程度のところに石綿加工工場があって、母はその工場に就労していたとのこと。胸膜肥厚斑形成は石綿粉塵の近隣暴露が原因と考えられた。

### 4. 悪性胸膜中皮腫を含む二重癌症例の検封

○岸本卓巳（岡山労災病院内科）

悪性胸膜中皮腫を含む二重癌症例3例の検討を行った。3例の性別はすべて男性で、年齢は84歳、76歳、69歳と高齢であった。Ⅱc型早期胃癌の合併が2例で前立腺癌の合併が1

例であったがいずれも悪性胸膜中皮腫により死亡に至っていた。発生時期では2例で同時性、1例では胃癌手術後3年を経て悪性中皮腫が発生していた。生存期間は1カ月から22カ月であり、放射線療法が奏効した1例ではCRが得られたため予後がよかったが、他の2例は治療できなかったため極めて予後が悪かった。職業歴では造船所配管工、旧日本海軍工廠、港湾労働者と石綿曝露が示唆された。また、剖検肺組織申から990-149,000個/5g肺湿重量の石綿小体を検出した。以上の3例はいずれも石綿曝露者であり、悪性胸膜中皮腫に合併した二重癌の報告は稀であるので報告する。

## 5. 悪性中皮腫における1p及び6qのLOH

○小島健作、武島幸男、井内康輝（広島大学医学部第二病理）

悪性中皮腫の腫瘍細胞にはさまざまな遺伝子異常が認められることは既に報告されているが、近年、1p及び6qのLOHが高頻度に認められるとの報告がある。そこで自験例を用い、これらの異常の有無を検討し、臨床病理学的諸因子との比較検討を試みる。対象は、20例（男性14例、女性6例）で剖検例15例、手術例5例である。これらのパラフィン包埋ブロックの薄切切片から型通りの方法でDNAを抽出し、1p及び6q上に存在するmicrosatellite markerを用いてLOHの有無を検索して報告する。

## 6. 石綿曝露に関連した胸膜病変の呼吸機能に及ぼす影響についての検討

○田村猛夏、宮崎隆治（国立療養所西奈良病院）、徳山猛、岡本行功、米田尚弘、春日宏友、成田亘啓（奈良医科大第二内科）

〔目的〕石綿曝露に関連した胸膜病変が呼吸機能に及ぼす影響について検討した。

〔対象と方法〕某石綿工場に勤務し、平成4年4月の検診時に胸部X線写真や呼吸機能検査を受けた者の中で、肺野病変が0型の者86名を対象とした。この対象について、胸膜病変の呼吸機能に及ぼす影響について検討した。

〔結果〕86名のうち胸膜病変を認める者は33名で、非石灰化プラーク20名、石灰化プラーク10名、びまん性胸膜肥厚3名であった。胸膜病変有りの者では%VCは88.55%で、胸膜病変なしの者では100.81%であり、両群間に有意差（ $p<0.01$ ）を認めた。

非石灰化プラーク有りの者では%VCは95.30%で胸膜病変なしの者との間に有意差を認めなかった。しかし、石灰化プラーク有りの者では%VCは81.30%、びまん性胸膜肥厚有りの者では%VCは67.67%であり、胸膜病変なしの者との間に有意差（ $p<0.01$ ）を認めた。

〔結語〕石綿曝露と関連した胸膜病変中で、石灰化プラークやびまん性胸膜肥厚は、%VCなどの呼吸機能の低下と有意に関連することが示唆された。

## 7. 宮崎での石綿関連疾患

○平岡武典（国立療養所宮崎病院）

宮崎医科大学には呼吸器を標榜する専門の内科がない。宮崎に転勤になって3年半が過ぎたが、これまで8例の石綿関連疾患に遭遇した。

血性胸水で、肺癌を疑うも悪性細胞が検出されないと紹介された患者。これまで何度も検診を受け、その度に異常を指摘され精密検査を受けさせられる人等がいた。

殆どが、石綿職歴を有し、はば典型例と思われるが、各々これまで職歴を聞かれたことが無いという共通点があった。石綿関連疾患に対する知識が無ければ、これらのケースのように、完全に見過ごされると言う事を物語っている。

また、元酒造会社勤務で蒸留の部署で働いていた男性で胸膜肥厚斑を呈した人を介し、その会社の過去5年間の職員検診のフィルムを検討したのでその結果についても報告する。